



第23回国民文化祭・いばらき2008

平成20年度

第十九回

大好きいばらき

作文コンクール

入賞作品集

平成20年11月
大好き いばらき 県民会議

はじめに

大好き いばらき 県民会議 会長

茨城県知事 橋本 昌

第十九回 大好き いばらき 作文コンクールにおきまして、入賞の榮に輝きました皆様に関心からお祝いを申し上げます。

大好き いばらき 県民会議では、家族・親子や地域の絆再生を目的とした子育てフォーラムやエコライフ運動・花と緑の環境美化、地域コミュニティの活性化など「やさしさとふれあいのある茨城づくり」を進めるため、各種事業に取り組んでおります。

その一環といたしまして、「わたしが発見！ いばらきの文化」をテーマに作文を募集しましたところ、県内の小・中学生及び高校生から四、七五九編の応募をいただき、厳正な審査の結果、本作品集に掲載の五三編が入賞となりました。応募された作品は、今年度開催された「国民文化祭・いばらき二〇〇八」にふさわしく、ふるさと茨城へ、そして自分たちの地域への関心を高め、様々な伝統文化等を紹介するものでした。「伝える」ということの大切さを家族や地域の方とのコミュニケーションの中から発見したことについて、素直な言葉でいきいきと表現されており、改めて茨城の奥深さ、素晴らしさを感じることができたものでした。

大好き いばらき 県民会議といたしましては、今後も「人が輝く、元気で住みよいいばらき」の実現を目指し、努力してまいりたいと考えておりますので、この作品集がさらに多くの県民の皆様にご読まれ、いばらきの文化を知っていただくこととなれば、誠に大きな喜びでございます。

最後に、審査にご協力いただきました方々をはじめ、ご支援・ご協力を賜りました関係者の皆様に関心から深く感謝申し上げます。

平成二〇年十一月

目次

◆はじめに 1

◆入賞作品 5

◎茨城県知事賞

まゆからできるふしぎな糸 筑西市立大田小学校 二年 菊池雄平 5

大すじいちゃんの『だつぺ』 北茨城市立中郷第二小学校 五年 最上嘉洋 5

いつまでも美しい千波湖で 水戸市立見川中学校 二年 都築愛 6

大好きなふるさとの伝統を繋ぐ 県立下妻第一高等学校 一年 木村早希 8

◎ハッスル黄門賞 (第23回国民文化祭茨城県実行委員会)

おおきなはなびのおおきなおと 常陸大宮市立山方南小学校 一年 佐藤一成 10

大好き いばらき 青なじみ 水戸市立梅が丘小学校 四年 吉武佳音 10

茨城の「こころ」に触れて つくば市立手代木中学校 三年 竹田紗知 11

茨城の自慢 県立水戸第三高等学校 二年 須能友香理 12

◎茨城県議会議長賞

みんなでいこうどうそじん 土浦市立土浦小学校 一年 加藤彩花 15

悲しい「しゃぼん玉」 古河市立名崎小学校 六年 清水稜太 15

七会の八木節源太踊り 城里町立七会中学校 一年 小滝万結 16

わたしのまちの宝探し 県立水戸第三高等学校 二年 高畑佳代子 17

◎茨城県教育長賞

茨城県天心記念美術館 常陸太田市立世矢小学校 三年 橋本和真 18

| | | | | |
|-------------------|--------------------|----|------------|----|
| 茨城のみどころさがし…………… | 東海村立中丸小学校…………… | 六年 | 野中貴文…………… | 19 |
| お盆と赤とんぼ…………… | 茨城大学教育学部附属中学校…………… | 二年 | 宇留野雅仁…………… | 20 |
| 私の地域の「八朔まつり」…………… | 県立水戸第三高等学校…………… | 一年 | 菊本朝子…………… | 21 |

◎茨城新聞社長賞

| | | | | |
|----------------------|-----------------|----|-------------|----|
| お父さんのたいこ…………… | 常総市立豊岡小学校…………… | 三年 | 鶴見尚大…………… | 23 |
| 国民文化祭 がんばれコスモ・ス…………… | 石岡市立石岡小学校…………… | 六年 | 櫻井香純…………… | 23 |
| 常陸と出雲の不思議な関係…………… | つくば市立吾妻中学校…………… | 一年 | 内藤潤…………… | 24 |
| 国際県IBARAKI…………… | 県立下妻第一高等学校…………… | 一年 | 芦ヶ谷真里奈…………… | 25 |

◎大好き いばらき 県民会議 理事長賞

| | | | | |
|------------------------|--------------------|----|------------|----|
| ぼくのまちのおまつり…………… | 常総市立水海道小学校…………… | 一年 | 高山颯斗…………… | 27 |
| はじめてのぼんづな…………… | 行方市立三和小学校…………… | 一年 | 須賀志央美…………… | 27 |
| まかべのぎおんまつり大すき…………… | 桜川市立真壁小学校…………… | 二年 | 田中亜実…………… | 28 |
| おかあさんのしごと…………… | 笠間市立友部小学校…………… | 二年 | 小島由香…………… | 28 |
| おばあちゃんに聞いた「通りゃんせ」…………… | 日立市立滑川小学校…………… | 二年 | 安藤華…………… | 29 |
| おじいちゃんちの、せつぶん…………… | つくば市立東小学校…………… | 二年 | 横田誓…………… | 30 |
| 名人がつたえるとの様のおかし…………… | 茨城大学教育学部附属小学校…………… | 三年 | 宮田ひかる…………… | 30 |
| わたしの町のひなまつり…………… | 桜川市立真壁小学校…………… | 三年 | 大塚佳穂…………… | 31 |
| 結城市の伝とう品…………… | 結城市立結城小学校…………… | 三年 | 塩畑零…………… | 32 |
| 大すきなつとう…………… | 桜川市立坂戸小学校…………… | 三年 | 仁平有香…………… | 32 |
| ずっと続けたい七夕祭り…………… | 常陸大宮市立長倉小学校…………… | 四年 | 茂垣りほ…………… | 33 |
| わたしが見つけた茨城の文化…………… | つくば市立真瀬小学校…………… | 四年 | 古澤優花…………… | 34 |
| おじいちゃんに聞いた昔話…………… | 下妻市立騰波ノ江小学校…………… | 四年 | 坂本梨奈…………… | 35 |
| まだらきじん祭…………… | 桜川市立雨引小学校…………… | 四年 | 蛭澤僚…………… | 36 |

| | | | | |
|---------------------------|-------------|----|-------|----|
| みんなの本米崎小学校 | 那珂市立本米崎小学校 | 四年 | 嶋崎仁美 | 37 |
| 町名の歴史発見 | 水戸市立城東小学校 | 五年 | 米永直人 | 38 |
| おばあちゃんの話 | 石岡市立林小学校 | 五年 | 大内真澄 | 39 |
| 私も湖の救世主に―― | 行方市立津澄小学校 | 五年 | 成田真子 | 40 |
| おじいちゃん、おばあちゃんの子供のころ | 古河市立釈迦小学校 | 六年 | 須藤彩佳 | 41 |
| 受けつがれていく大切なもの | 筑西市立養蚕小学校 | 六年 | 浅香里菜 | 41 |
| いばらきの文化『笠間焼』 | 東海村立東海南中学校 | 一年 | 土井周平 | 42 |
| 「西塩子の回り舞台」について | 常陸大宮市立第一中学校 | 一年 | 大貫圭 | 43 |
| 故郷はそばの里 | 常陸太田市立南中学校 | 一年 | 大津悠嗣 | 44 |
| わたしが発見！茨城の方言 | 鹿嶋市立平井中学校 | 一年 | 中村美彩 | 45 |
| 方言達人 | 常陸太田市立水府中学校 | 一年 | 会沢稜亮 | 47 |
| 私の大好きな御前山 | 土浦市立都和中学校 | 二年 | 檜山万由子 | 48 |
| 美しいまち土浦 | 土浦市立都和中学校 | 二年 | 五十嵐理乃 | 49 |
| 方言の良い所 | 水戸市立緑岡中学校 | 二年 | 猿田若菜 | 50 |
| 茨城県の食文化 | つくば市立竹園東中学校 | 三年 | 武政晴香 | 51 |
| 心の器 | 那珂市立第四中学校 | 三年 | 田崎海斗 | 52 |
| 自分色の筑波山 | 結城市立結城南中学校 | 三年 | 黒田雅樹 | 54 |
| わたしのまちのおまつり | 県立茨城東高等学校 | 一年 | 萩谷勇也 | 55 |
| 僕らの茨城県 | 県立猿島高等学校 | 二年 | 吉田溪太 | 56 |
| ◆第二十三回国民文化祭・いばらき二〇〇八協賛事業 | | | | |
| 第十九回 大好き いばらき 作文コンクール実施要項 | | | | 58 |
| ◆市町村別応募状況（校内審査後） | | | | 62 |
| ◆審査委員 | | | | 63 |

まゆからうできるふしぎな糸

筑西市立大田小学校 二年 菊池雄平

「キュッ、キュッ、キュッ。」

ばあちゃんの手からは、まほうのように、どんどん糸ができてきます。とつても細くて、きらきらしたきれいな糸です。ふしぎに思い、ばあちゃんの手もとをのぞきこんで見ると、「糸とりだよ。わたから糸をつむいでいるんだ。この糸で、き物を作るんだよ。」

と、ゆうきつむぎのことを教えてくれました。

ぼくのお母さんのじつ家はゆうき市にあります。「ゆうきつむぎ」というのは、とつてもゆうきなき物で、むかしから一つ一つ手さぎようで作られる大切なものだそうです。「カイコ」という青虫みたいな虫が「まゆ」という白くて丸いからを作り、そのまゆを「わた」にします。ばあちゃんが糸にしているのは、この「わた」で、ばあちゃんの糸に色をつけておつていくと、「つむぎ」というぬのになるそうです。

ぼくもまねをして、わたをひっぱってみました。ただちぎれてしまうだけで、糸にはなりません。かんたんに見える「糸つむぎ」ですが、とつてもむずかしいことがわかりました。ばあちゃんは、指につばをつけながら糸をつむぎます。

「きたなくないの。」

「つばでないのだめなんだよ。水では、つむぎのよさが出ないんだね。」

なんだかともふしぎに思いました。

家に帰ると、お母さんがタンスの中から大きな紙のふくろを出してきました。

「お母さんのたから物よ。ばあちゃんの糸で作ったんだよ。あなたにきせてあげられないのがざんねんだけどね。」

ピンク色のつむぎのき物でした。ぼくも、いつかきつとばあちゃんの糸で、およめさんにつむぎのき物を作ってあげたいです。ばあちゃん、ずっとずっと元気で、きれいな糸をつむいでください。

大すぎじいちゃんの『だつへ』

北茨城市立中郷第二小学校 五年 最上嘉洋

「どれ、ちーつとさん歩いてくつぺ。嘉洋も行くがあ？」

「うん、行く、行く。」

じいちゃんにさそわれ、ぼくは軽く返事をした。でも、じいちゃんとのさん歩は、ちーつとではなかった。さん歩中に、じいちゃんは、

「あかねひらの山に、雲がかかってつがら、明日は雨だつぺなあ。嘉洋、学校にはカサ持ったほうがいいべ。」

と、天気予報士になったり、

「昔、ここは炭ごうの町で、石炭のにおいがプーンとして、年中トラックが走ってたんだあ、今は炭ごうもなくなり、静

がな町になっちまったあ、道路もガタボコでなあ…。」

と、昔の町の風景や、暮らしぶりを説明するガイドさんになった。じいちゃんの昔話は、教科書にのってない内容で、想像しかできないぼくも、その時代が見えたような気がした。音の出る葉っぱや、食べられる草も見つけ、まるで宝さがしをしているようにわくわくし、気がつくくと、どんどん遠くまで歩いていった。

と中、じいちゃんがジュースを買ってくれ、ぼくは息をつかずゴクゴクといつきに飲んだ。冷たいジュースが、スーッと体の中に入っていくのがわかった。二時間ぐらいのさん歩で、家に着いた時、ひざがカクツとなり、足全体が重たかった。ぼくは、じいちゃんに言った。

「じいちゃんはずいよ、つかれないの?」

「んだな、ちーつと歩きすぎだがあ? 今度は水とう持って行くべなあ、はははは。」

と、あせいっぱいの顔を手ぬぐいでふきながら、笑って答えるじいちゃん。三年前、父の転きんで茨城に引っこしてきた時、ぼくは、じいちゃんの茨城なまりが通じなかった。

ゴミをどこに捨てたらよいのかと聞くと、

「じいちゃんがかつぼるから、そのまんまにしとげえ、嘉洋にたのんだら悪かつべ。」

おふろに入っていると、

「じいちゃんのあとは、あちーがら、うんとうめて入れえ、んだげど、うめすぎつと、ひゃつこくなるから、気ーつけるよ。」

など、だく点がつく発音や、わからない方言が多かった。で

も、茨城べんはどこかポカポカあったかく、きれいな言葉づかいではないけれど、じいちゃんの思いやりの心が伝わり、ふるさとのおいがする。だつべの中にやさしさがギョツとつまつてて、ぼくは大すきだ。これからも、じいちゃんや近所のお年よりの方にたくさん話を聞いて、歴史や文化、自然を大切にし、茨城がぼくのふるさとなればうれしい。そして、ぼくがおとなになった時、「むかーし、昔、この町は…。」と、未来へつなぐことができたなら、すてきなあと思う。

さん歩後、少し休んでからぼくは言った。

「じいちゃん、キャッチボールやつべ。」

「んだな、やつがあ、んだけど、外はまだあちーから、ぼろしかぶんねーとだめだつべ。」

「うん、そうだね、だめだつべ!!」

いつまでも美しい千波湖で

水戸市立見川中学校 二年 都 築 愛

「わあ、すごーい。」

八月一日の夜。私は千波湖畔で、次々と打ち上げられる花火を見た。色とりどりの花火。大きな音と共に、夜空に大輪の花を咲かせる。毎年見ているけれど、毎年違った趣向が凝らされていて、人々を飽きさせない。黄門祭り第一日目のイベントとして、毎年多くの人々が千波湖の美しい夜空を見上げている。水戸市に住んでいてよかつたなと思うひとときである。

花火大会の夜は、にぎやかで華やかな色に包まれる千波湖だが、昼間は静かで、穏やかな水面にボートが浮かんでいる。休日に、家族連れがゆったりとボートをこぐ光景を、目にするのがよくある。そんな光景を目にすると、小さい頃、家族と一緒にボートに乗っていた自分を思い出す。ボートから見える、美しい水面や植物などが、今でも脳裏に残っている。

しかし、今年になって痛ましい事件が起こった。千波湖にいる白鳥や黒鳥が、少年に乱暴されて殺されてしまったのである。休日に湖に行くと、寄ってくるほど人間に慣れていた白鳥たち。そんな愛らしい白鳥たちを、面白がって殺してしまふとは、なんてひどいことをするのだろうか。鳥にだって、私たちと同じように命がある。どんなに小さい命だとしても、人間と同じ価値があるのだ。その大切な命を、人形を壊すように絶やしてしまった少年は、何を考えていたのだろうか。また、その様子を見ていた白鳥たちは、何を思ったのだろうか。この事件があつてしばらくは、白鳥たちが人間に寄ってくることはなかったという。

それから三か月程が過ぎ、千波湖は、元の穏やかさを取り戻した。先日、千波湖を訪れた時、美しい水面をすいすいと泳ぐ白鳥たちを見て、思わず、

「元気になってよかったね。」

と声をかけてしまった。白鳥たちも、嬉しそうに頷いているような気がした。そして、私も嬉しくなった。

千波湖は、四季折々に違った表情を見せ、人々を楽しませてくれる。桜の花満開で、水面までも桃色に染まったかと思

うほど、花びらで敷き詰められる、華やかな春の千波湖。何百発もの見事な花火が打ち上げられ、多くの人を魅了する、豪快な夏の千波湖。萩の小花に囲まれ、紅葉した木々を眺めながら、冬の訪れをゆつくりと待っている、静かな秋の千波湖。そして、水面にうつすらと氷が張り、キラキラと光を放ち輝きを見せる、美しい冬の千波湖。今は、暑い太陽の熱を一面で受け、一年分のエネルギーを内にためこんでいるような雄大さを感じる。私は、一年中いつでも色々な魅力を見せてくれる、そんな千波湖が大好きだ。

私の母は、私が赤ちゃんの時から、この千波湖をよく訪れたという。子供と遊びながら湖を眺めることが好きだった母の影響もあつたか、私は、千波湖を見てみると何故か心が落ち着く。私が、雄大な湖をずっと見てきたように、千波湖は、私が赤ちゃんの時から今まで成長してきた様子を、見守っていてくれたような気がする。嬉しい時の笑顔も、悲しい時の涙も、湖は知っている。そんな私の表情をこれからも映すことができるような、きれいな水面を保ち続けてほしい。

私たち水戸市民の顔、茨城県民の誇りとしての千波湖を、みんなで守り続けていきたい。二度と湖が汚れないように、みんなが気をつけていくことが必要である。また、子供から大人まで、たくさん目の目で湖を見守ることも必要なのである。

そして、日本一の素晴らしい湖と言われるように、これからもずっと、千波湖を大切にしていこう。そのために、私にできることがあるならば、活動していこうと思っている。

大好きなふるわりの伝統を繋ぐ

県立下妻第一高等学校 一年 木村 早希

私は、今住んでいる町が大好きだ。畑や田んぼばかりで、電車も走っていない。不便なことも多少はあるが、この町に生まれ、この町で育ってきたことを誇りに思っている。

私の町の良い所を紹介すると、まず、食べ物が美味しい。茨城県の特産品というと、第一には納豆が連想されるが、私の町では、レタスやネギなどの野菜づくりが盛んである。地元で採れる野菜や果物はとても新鮮で栄養があり、学校給食などにも積極的に取り入れられている。また、私の家は今ももう農家ではないのだが、祖母は今でも、畑で様々な野菜をつくってくれている。野菜に関しては、ほぼ自給自足の生活だ。これは何もわが家に限ったことではなく、多くの家庭が農家でなくとも野菜を栽培している。しかし、この生活がどこでも送れるのかと言えば、そうではない。私たちの生活にとっては当たり前のことであるから普段は忘れてしまいがちだが、このような生活を送れるのは、茨城の豊かな自然があるおかげであり、とてもありがたいことなのだと感じている。そしてもう一つ、忘れてはならない良い点は、町民がみな良い人たちばかりだということだ。近所付き合いが盛んで、採れた野菜のお裾分けなども日常茶飯事である。挨拶をすると、名前も知らない通りすがりの人でもきちんとしてくれる。おじいちゃんおばあちゃんも、みな生き生きとしていて輝いている。

まだまだ自慢したいことは山ほどあるのだが、最近になって、その他にも未来に繋いでいきたい、素晴らしい文化があることに気が付いた。そのきっかけは、ある日、学校で古典の授業を受けていた時のことであった。文語の動詞の中に、力行変格活用の「来」というものがあり、それについて学んでいて、先生がとても興味深いことを教えてくださったのだ。それは何かというと、方言についてである。私の住む町を含めたその周辺の地域には、誰かに急いで来てもらいたい時に使う、「はっこ」や「はっこよ」という方言がある。使う人の数はあまり多くなく、実際に私が知ったのも中学生になつてからである。それから、おもしろい響きだなあとはいいつつも、深く考えることは無かった。しかし、先日その先生が教えてくださったことには、なんと、その方言は、先程の「来」の命令形「来よ」が変形したものなのだそう。もったいないの意味である「あたらし」という方言も、元を辿れば、古典の「あたらし」という語から来ているらしい。この他にもまだまだたくさんあるに違いないが、つまり私たちは、大昔から使われていたことばを今でも使っているということになるのだ。

私はこの話を聞いて、とても感動した。使っている人は少ないながらも、千年以上も前のことばが、私の身近な所で絶えることなく継承されている。今から何千年後かに、現在私たちが使っていることばが残っているとしたら、と考えてみても、全く想像がつかない。それほどスケールが大きく、驚くべきことである。また、私は、感動すると同時に、大変嬉しく思った。今まで、地元以外の人に方言やなまりを使うと

馬鹿にされることがあったので、使うことを躊躇していた。しかし自分の地元の方言の偉大さを知った今は、胸を張って使うことができる。誰かに馬鹿にされたとしても、もうためらわない。いかに素晴らしく、凄いものなのかを伝えられる。そして、地元の伝統文化に誇りを持たれたことで、自分が他の地域の異文化に出会ったときでも、素直に受け入れ、尊重することができるようになると思う。

私は、先生が私たちに教えてくださったように、これからの未来を担う子どもたちにこのことを伝え、どうか受け継いでいってほしい。現代社会では若者のことばの乱れが顕著に現れていて、私自身もそれに染まってしまっている。しかし、このままでは文化が衰退し、私たちが、今まですつと繋がってきたバトンを落としてしまうことになる。そうならないためにも、私は、自分自身を見直し、変わっていかなければならぬと思った。今回の出来事が、それに気付かせてくれた。私たち若者には、「これまで」と「これから」の橋渡し役になる責任がある。

もちろん方言だけではなく、農業や伝統行事、人との関わり方など、たくさんの方文化に触れ、その重みを感じながら生活していきたい。それが私にとつての、大好きなふるさとへの恩返しであり、ふるさとを守ることなのだ。

